

◆飛鳥池東方遺跡の調査

—第92次・第91-6次

はじめに

本調査は、奈良県が計画する万葉ミュージアム（仮称）の建設に伴う事前調査である。調査地は飛鳥寺の南東方に位置し、飛鳥池の東岸をなす丘陵と、飛鳥坐神社南の丘陵に挟まれた、北西から南東へ遡る谷筋で、岡寺の北側から下る谷を主とし、これに小原の集落から下る谷が合流している。谷川はすでに整理され、谷の西寄りにコンクリート製開渠の農業用水路として整備されている。

調査対象地は、ミュージアム建設予定地の東半にあたり、建物外構の盛土による造成と、既存用水路の付け替えが計画されている。昨年度、第86次調査として、調査対象面積約6,500m²について、8箇所、合計1,112m²のトレンチを設け、遺構面と谷の堆積状況を把握する目的で調査を行った。谷の西寄りを流れる流路SD010と、これに

平行する5時期の掘立柱塀や、谷の中央東寄りの大規模建物等を検出している(『年報1998-II』)。本年度は調査対象地を、南方へ拡げた約10,500m²とし、第86次調査の成果を勘案しながら、水路付替工事に関わる部分、および旧流路の一部を対象に、第92次調査として10箇所のトレンチを設定した(図57)。発掘面積は合計604m²、調査期間は4月7日から6月15日である。また第92次調査の後、第91-6次調査として工事立会調査を行った。各トレンチの面積と調査期間を表4に示す。

本調査については、飛鳥池遺跡の調査と併せて、万葉ミュージアム関連の報告書の刊行が予定されている。詳細報告はこれに委ねることとし、ここでは各トレントにおける主要遺構と出土遺物の概要を述べる。

1 第92次調查

A トレーニチ

調査地の南端、既存用水路から南西方向に最も高い水田 ($H=114.6\text{m}$) に設定した、北で東へ振れる南北 4 m 、東西 5 m の調査区である。

基本層序は耕土、褐灰色粘質土（床土）で、トレンチ

表4 調査面積と調査期間

トレンチ	大-中地区名	面積	調査期間
92-A	5AKA-B	19m ²	4.15~4.28
92-B	5AKA-B	27m ²	4.13~4.24
92-C	5AKA-A	22m ²	4.7~5.27
92-D	5AKA-A	18m ²	4.13~5.28
92-E	5AKA-A	25m ²	4.7~4.27
92-F	5AKA-A, 5AME-F	131m ²	4.13~5.29
92-G	5AME-F	45m ²	4.16~5.26
92-H	5AME-F	102m ²	4.15~5.29
92-I	5BAS-M	195m ²	4.21~6.15
92-J	5BAS-M	20m ²	5.25~6.5
91-6南	5BAS-B	60m ²	6.18~6.19
91-6北	5BAS-A	45m ²	6.26~6.29

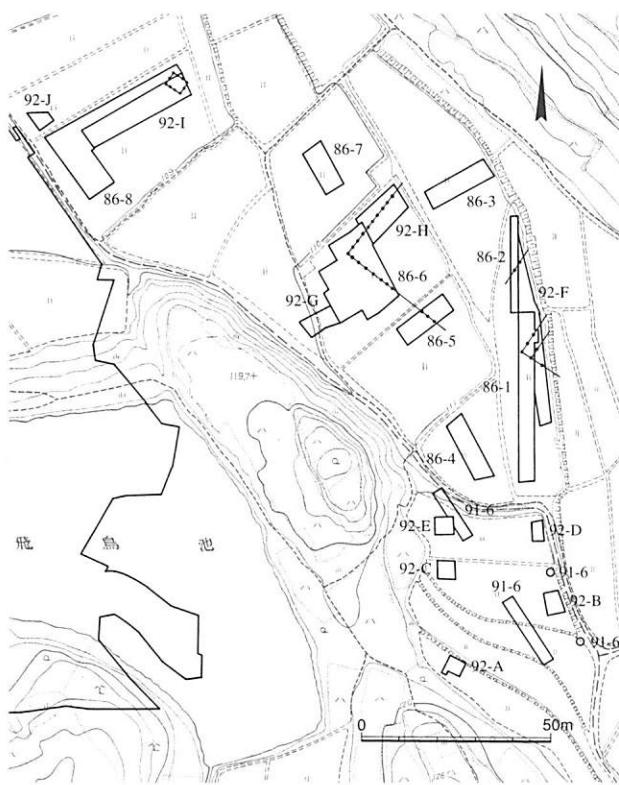


図57 第92次調査位置図 1:2000

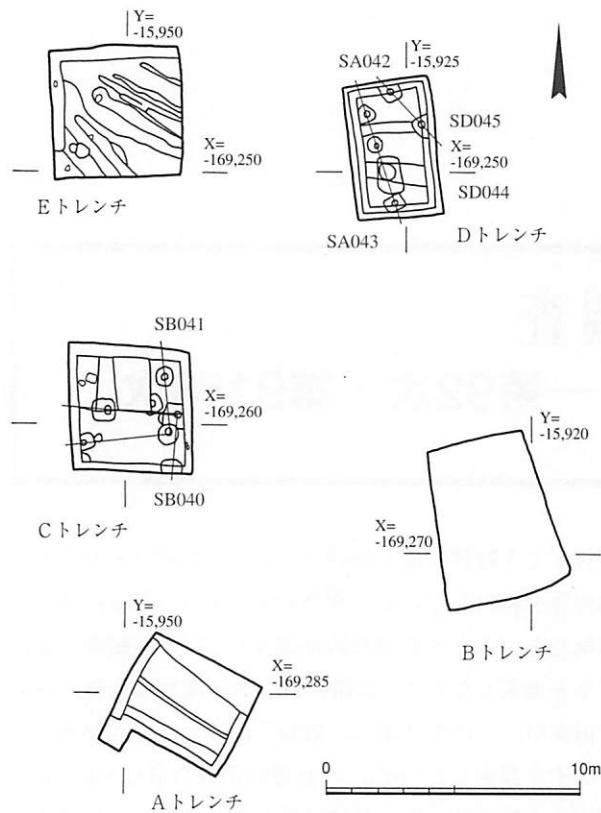


図56 第92次調査遺構図1 1:300

南辺西端から丘陵側へ延ばしたサブトレンチで、表土直下に地山の岩盤（H=113.9～114.5m）を確認したが、地山は谷に向かって急激に傾斜しており、トレンチ北端では地山に達しなかった。トレンチ南の丘陵を削平して耕地とし、丘陵崩落土を混交しながら耕作されていたことがわかる。等高線に沿う方向の耕作溝を検出したのみで、顕著な遺構はみられない。

Bトレンチ

Aトレンチの3段下の水田（H=112.4m）で既存用水路沿いに設定した、北で西に振れる南北6m、東西4.5mの調査区である。

基本層序は耕土、暗青褐色粘土（床土）で、明瞭な遺構面がなく、H=112.0m以下はトレンチ全体が流路堆積となり、淡褐色砂、暗灰色粘土等が堆積する。H=110.8m以下は粗砂層で、径20～30cmの丸石が混じる。

Cトレンチ

Bトレンチと同じ水田の、丘陵裾寄りに設定した、南北5m、東西4.5mの調査区である。

耕土、床土を除去した茶褐色土面（H=112.0m）で遺構検出を行い、北半では茶褐色土を除去して茶褐色粘質土面（H=111.6m）で下層の状況を確認した。なおH=111.5m以下は暗青灰色粘土・暗青灰色砂質土等の斜面への堆積を確認したが、地山まで達しなかった。建物2棟を検出したが、これらと組み合わない柱穴があり、少なくとも3棟が重複している。

掘立柱建物SB040 トレンチ中でL字形に柱穴3基を検出し、建物の北東隅にあたると考える。掘形は80cm角ほどで、柱間寸法は東西9尺、南北8尺で、棟方向は未確定だが、北で東へ5度の振れを測る。

掘立柱建物SB041 トレンチ中でL字形に柱穴3基を検出し、建物の南東隅にあたると考える。掘形は円形に近く、径80cmほどで、柱間寸法は東西11尺、南北7.5尺で、棟方向は未確定だが、北で西へ5度の振れを測る。

Dトレンチ

B・Cトレンチの1段下の水田（H=111.9m）の既存用水路寄りに設定した、北で西へ振れる南北5m、東西3.5mの調査区である。耕土、黄褐色粘質土・淡黄灰褐色粘質土・灰褐色粘質土（床土）を除去した灰褐色砂質土面（H=111.1m）が遺構面で、南北方向の堀2条と東西素掘溝2条を検出している。

掘立柱堀SA042 トレンチ北東寄りで柱穴2基を検出した。掘形は80cm角ほどで、柱間寸法は6尺、北で西へ43度の振れを測る。トレンチ西方に想定される流路に沿う堀であろう。

掘立柱堀SA043 トレンチ北西角から南辺中央まで柱穴4基を検出した。掘形は径80cmの円形あるいは80×60cmの方形で、柱間寸法は4尺、北で西へ20度の振れを測る。

トレンチ西方の流路に沿う堀で、SA042を造り替えたか。

東西溝SD044 トレンチ南寄り、幅70～90cm、深さ35cmの素掘溝。灰褐色粘質土が堆積。SA043より新しい。

東西溝SD045 トレンチ中央、幅40～50cm、深さ30cmの素掘溝。黄灰色砂質土が堆積。SA042より新しい。

Eトレンチ

Dトレンチと同じ水田の丘陵裾寄りに設定した、南北5m、東西5mの調査区である。

基本層序は、Dトレンチと同様であるが、床土下に炭化物混りの遺物包含層があり、これを除去してトレンチ南西でH=111.7m、北東でH=111.2mまで北東下がりの緩傾斜面を検出した。この斜面上の遺構は、等高線に沿う耕作溝数条のみである。

Fトレンチ

調査地東端の水田（H=111.3m）の新設用水路施工部分に設けた調査区で、第86次調査1・2トレンチの東側に沿う。南北50m、幅3.5mで、北半で第86次トレンチと重複する。

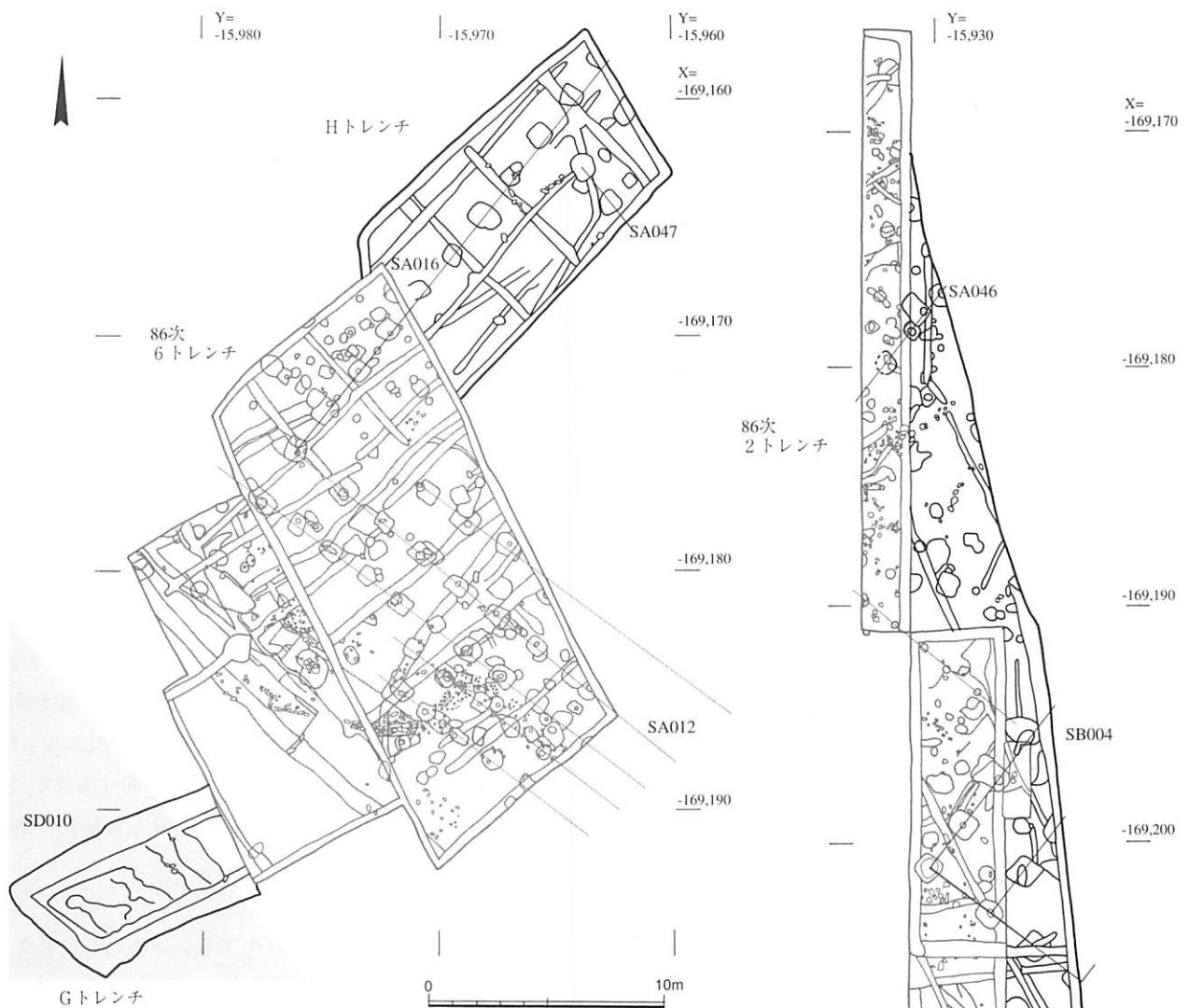


図59 第92次調査遺構図2 1:300

基本層序は、耕土、黄灰色粘質土（床土）、瓦礫層（遺物包含層）で、これを除去した暗灰色土面で遺構検出を行った。遺構面高は110.7～111.1mで、第86次1トレンチ北東隅付近が最も高く、南北に緩やかに下る。

掘立柱建物SB004 第86次調査で検出した比較的規模の大きい建物で、新たに5柱穴を検出し、西庇付の南北棟となった。柱間寸法は桁行・梁間とも8尺、庇の出9尺で、北で東へ37度の振れを測る。南妻面棟通りの柱穴は残存深さ65cm（底面H=110.3m）で、第86次検出の身舎南西隅柱掘形（底面H=109.7m）よりは深い。また身舎西側柱列の南から第2柱の掘形には、拳大～人頭大の礫が多数投入されていた。なお、東庇がついて東西両面庇の建物となる可能性を残している。

掘立柱塀SA046 トレンチ北寄りで検出した柱穴3基で、第86次2トレンチへ延びる。掘形は70cm角の隅丸方形で、柱間寸法は6尺、北で東へ37度を測り、SB004の西庇柱列から15m離れて、平行する。SB004を含む区画の北西を限る塀であろうか。



図60 流路SD010 Gトレンチ東から

Gトレンチ

第86次調査の4トレンチと8トレンチで検出した流路SD010の、中間部での検出を目的とした調査区である。第86次6トレンチの西辺南寄りから既存用水路東の舗装路まで拡張し、東西9.5m、幅5mを設定した。2段の水田（H=109.8m・109.3m）にまたがる。

基本層序は耕土、褐色粘質土・明灰色細砂・黄灰色砂質土など（床土）、灰色粘質土で、これを除去するとトレンチ東寄りは礫混り灰白色砂（遺物包含層）、西寄り6mは流路堆積となる。床土中では、3時期以上の古い水田畦畔も観察される。

流路SD010 流路の堆積は大きく4時期に分けられる。最末期の東岸は、トレンチ西端に近く、礫の堆積で形成され（H=108.5m）、東にあふれている。流路中には暗灰色粘質土が堆積する。西岸はさらに西方であった。

後期流路は、東岸が暗灰色粘質土（H=108.6m）、西岸は前述の礫の堆積となる。流路底はH=108.1mで、深さは50cm程であった。流路中には灰白色砂、暗青灰色粘質土などが堆積し、奈良時代後半までの遺物を含む。

後期流路の東岸には木層を含む暗褐色粘質土の前期流路の古い堆積が残っており、木簡1点が出土した。

初期の流路の東岸は、後期流路東岸の東約1mにあり、第86次6トレンチから続く小礫を含む灰色砂の遺構面（H=108.6m）が、急に落ち込んで青灰色粘土の平坦面（H=107.7～108.0m）が2mほどあり、さらに落ち込んで最深部（H=107.5m）となる。底は青灰色の岩盤である。最深部は幅1.5m程で、岩盤は西へ向かって再び高まっていく状況が観察された。堆積は、人頭大までの礫を含む暗灰色砂、暗灰色粗砂などである。初期流路は、北で西へ50度ほど振れており、第86次5・6トレンチで検出した5条の堀の振れ（北で西へ51～54度）を規制していたことがわかる。

Hトレンチ

第86次6トレンチの東辺北端を東へ拡張した調査区で、東で北へ振れる南北8m、東西13mを設定した。

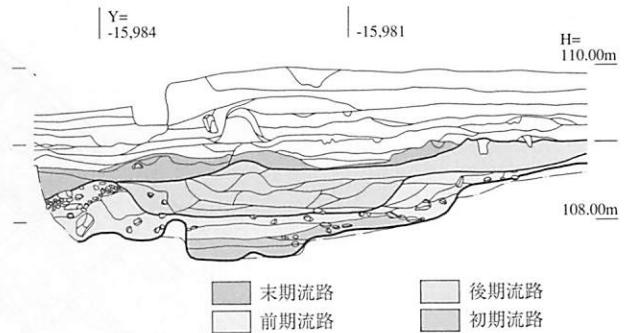


図61 流路SD010土層図 1:100 Gトレンチ部分

基本層序は耕土、灰色土・黄灰色土（床土）、黄灰色粘質土で、これを除去した暗褐色土面（H=109.4m）で遺構検出を行った。検出遺構は掘立柱堀2条である。

掘立柱堀SA016 第86次調査で検出した東西堀の東延長部分で、柱穴7基を新たに検出し、10間以上の堀となった。柱間寸法は7尺等間で、第86次6トレンチ内で南北堀SA012を取りつく部分のみ8尺+6尺と柱間を調整していることが確認された。振れは東で北へ53度を測る。

掘立柱堀SA047 トレンチ東端寄りで柱穴2基を検出した。掘形は1m角ほどの隅丸方形、柱間寸法は6尺で、SA016の西から第9柱に南から取りつく可能性がある。SA012との間隔は17mほどである。

Iトレンチ

第86次調査8トレンチのサブトレンチの南に接する、南北5.5m、東西31mの調査区である。基本層序は、暗褐色砂質土（耕土）、暗灰褐色砂質土・褐色砂質土（床土）、褐灰色粘質土（遺物包含層）で、これを除去した褐灰色砂質土面で遺構検出を行った。水田面高はH=108.1m、遺構面高は107.4～107.7mで、この遺構面は、トレンチ東から12m付近まで続き、以西は平安時代まで遡る水田となる。この下層で、トレンチ東から18mに流路SD010の東岸を検出した。SD010の調査は、第86次トレンチの埋土が崩落する恐れがあるため、幅2mの未発掘部分を残し、トレンチ南半の幅4.5mとした。

掘立柱堀SA048 褐灰色砂質土遺構面の西端近くで検出した柱穴2基で、第86次の1基と合せて2間の南北堀と考える。柱間寸法は6尺、北で西へ50度の振れを測る。

掘立柱堀SA049 SA048の東3mで検出した柱穴5基で、4間の南北堀と考える。柱間寸法は5尺。第86次調査の南北堀SA033の南にあるが、振れも柱間も合わず、別遺構と看做ざるをえない。

掘立柱建物SB034 第86次検出の東西堀SA034は、柱穴6基を新たに検出し、SA034を北妻とする桁行3間、梁間2間の南北棟掘立柱建物となった。柱間寸法は桁行・梁間とも6尺で、北で西へ50度の振れを測る。

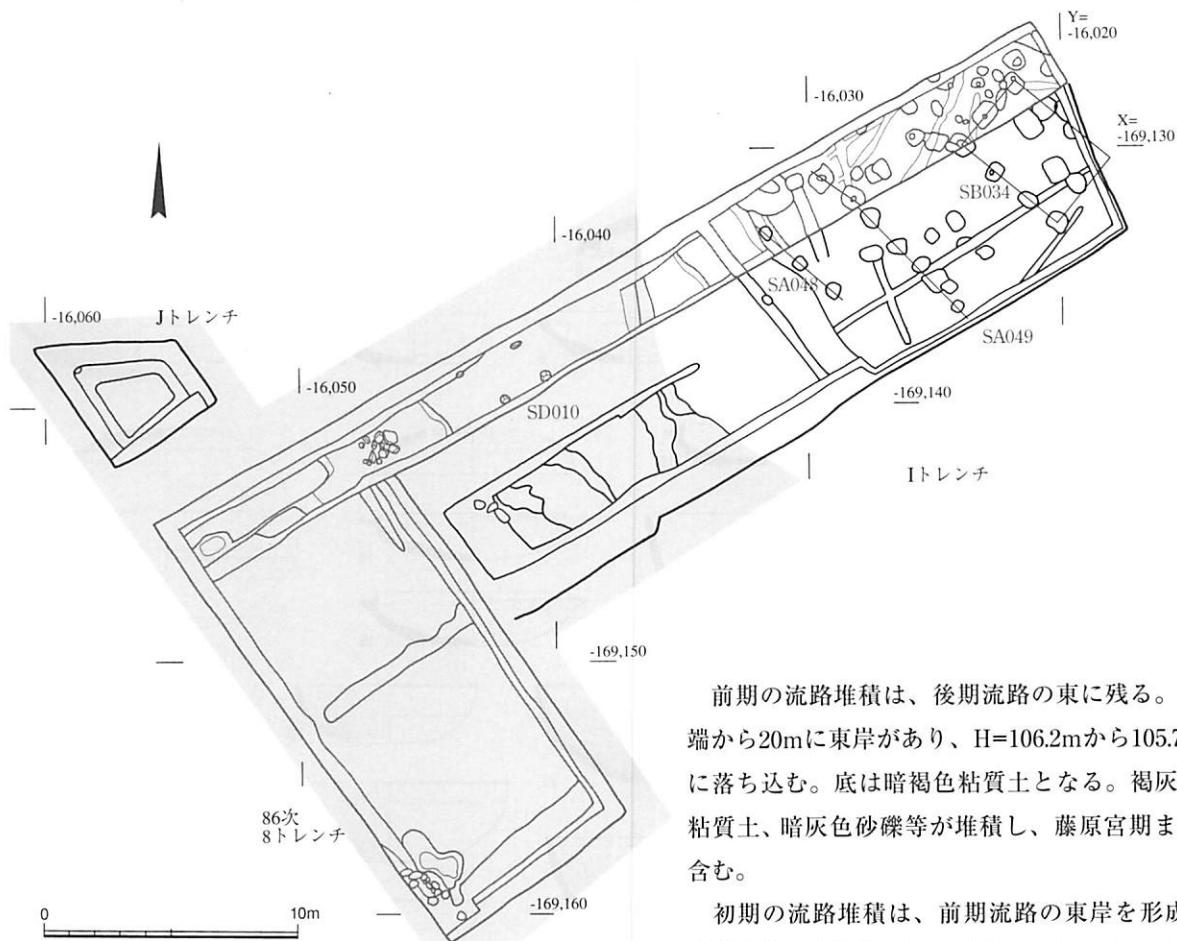


図60 第92次調査遺構図3 1:300

流路SD010 トレンチ東端から18mで、暗青灰色粘土からなる流路東岸 ($H=106.8m$) を検出した。流路堆積は、大きく4時期に分けられる。最末期の流路は東岸から6m付近に中州をもつ浅い流れとなり、中州の東では暗青灰色砂質土、暗灰褐色砂質土、西では暗褐灰色粘質土、暗灰褐色粘質土が堆積する。流路底は西 $H=106.1m$ 、東 $106.3m$ である。平安時代前期の遺物を含む。

後期の流路は、主にトレンチ西寄りにある。トレンチ東端から23m付近が東岸で、 $H=106.2m$ から $105.3m$ まで急に落ち込み、幅1.5mほどの最深部を形成し、西へ向かって再び高まっていく状況である。流路堆積は長径70cmまでの礫を多数含む褐色砂、暗灰色砂、灰白色砂である。藤原宮期から奈良時代の遺物を含む。

前期の流路堆積は、後期流路の東に残る。トレンチ東端から20mに東岸があり、 $H=106.2m$ から $105.7m$ まで急に落ち込む。底は暗褐色粘質土となる。褐色砂、褐色粘質土、暗灰色砂礫等が堆積し、藤原宮期までの遺物を含む。

初期の流路堆積は、前期流路の東岸を形成していく、流路全体の東岸から2mの間で、 $H=106.8m$ から $105.8m$ まで下って底となる。淡褐色砂、黒灰色砂、暗褐色粘質土、暗灰色細砂が堆積し、7世紀前半の遺物を含む。流路外の堆積は上から暗青灰色粘土、礫混り青灰色砂質土、礫混り黒灰色砂質土、暗褐色粘質土の自然堆積があり、底は青白色の岩盤となる。

Jトレンチ

Iトレンチの北側水田 ($H=107.8m$) に設定した、南北5.5m、東西5mの北で西へ振れる台形の調査区である。

耕土、床土を除去した $H=107.3m$ 以下は、トレンチ全体が流路SD010の堆積である。灰色砂混りの礫層面 ($H=106.2$ ~ $106.0m$) を確認したが、流路底まで達していない。なお第84次調査で検出した石組方形池SG30から延びる石組溝SD31は、このトレンチでも確認できない。SD31の東端はSD010で搅乱されているのだろう。

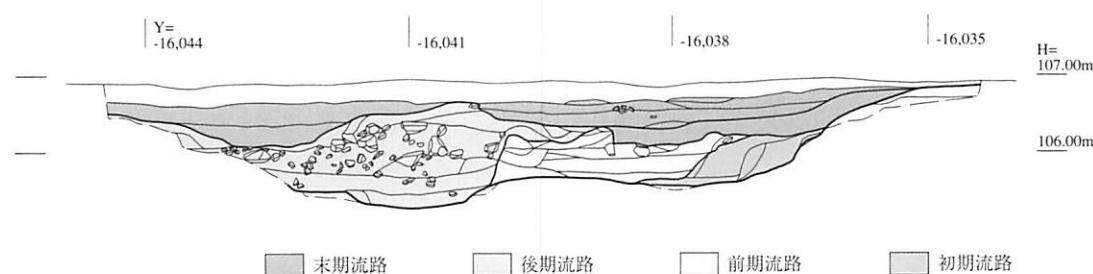


図63 流路SD010土層図 1:100 Iトレンチ部分

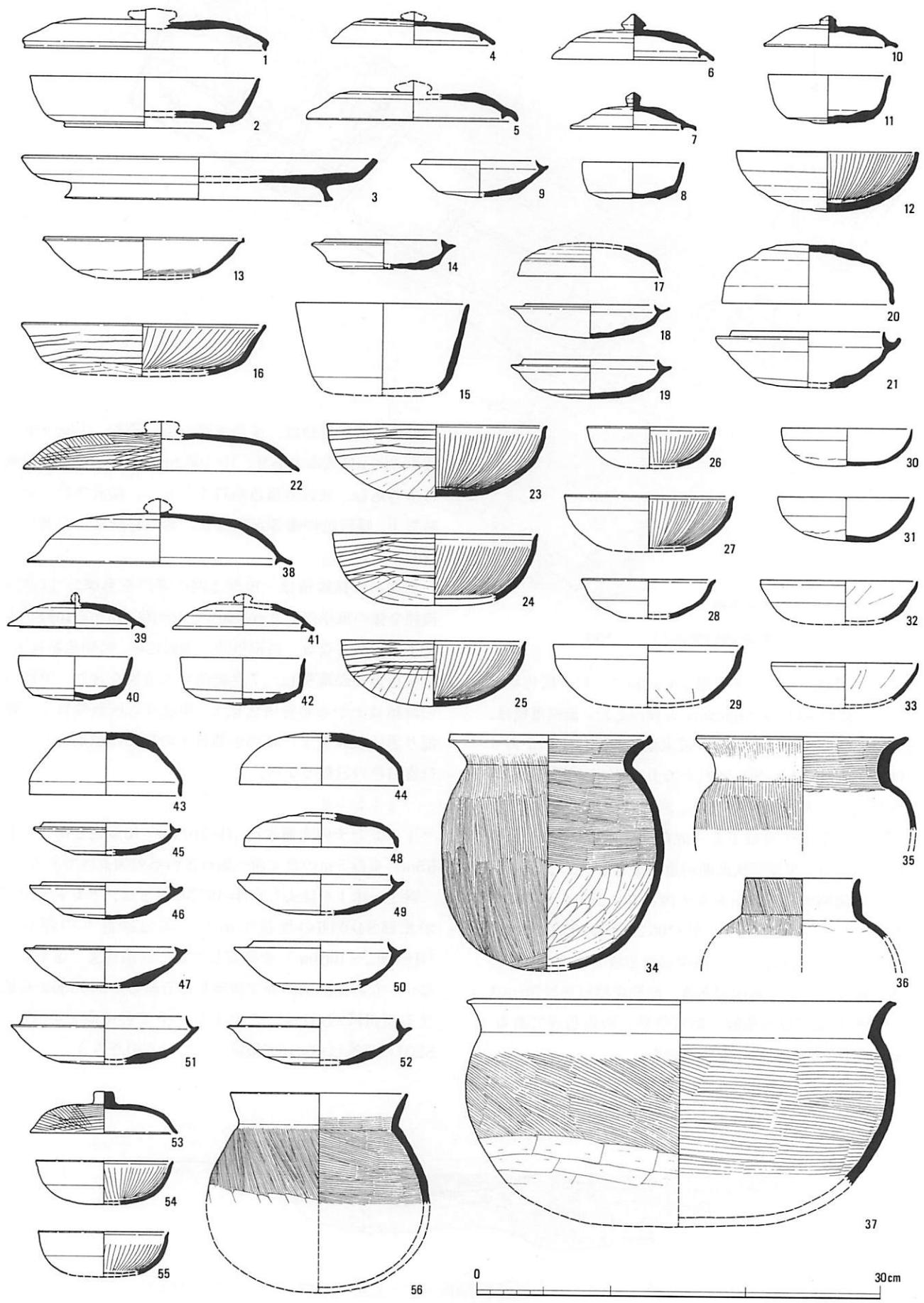


図64 流路SD010出土土器 1:4

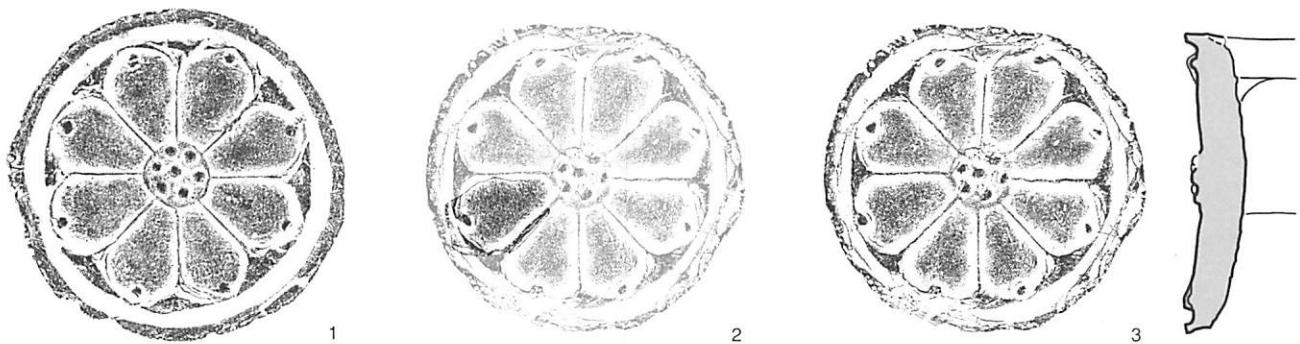


図65 第92次調査出土瓦および同范瓦 1:4

2 遺物

遺構面上の瓦礫層および、流路SD010の堆積中から多種多量の遺物が出土した。現在も整理作業が進行中であり、ここでは主要遺物の概要を記す。

木製品 曲物側板1点、曲物底板2点、斎串1点などが出土した。またGトレンチの流路SD010の初期の堆積から木簡1点が出土した。112×20×8mmの上端両側面に切り欠きをもつ荷札の形で、片面に「煮物」と記す。

金属製品 Iトレンチの流路SD010上層から銅管1点が出土した。長さ63mmで両端は破断している。外径5mmで、厚さ0.8mmの銅板を丸めて鎌付けしている。

工房関連遺物 フイゴ羽口片、熔銅、鉛滓、坩堝が出土し、飛鳥池工房との関連が注目される。 (長尾 充)

土器・土製品 縄文時代から鎌倉時代のものがあるが7世紀代が主体を占める。流路SD010、中でも第86次調査8トレンチに南接したIトレンチの流路出土土器は良好な資料で、7世紀から平安時代にいたる比較的多量の土師器・須恵器があり、少量の縄文中期～後期の土器が含まれる。7世紀の土器には漆壺、漆パレット、トリベに使用した土器があり、口径4cmほどの小型の坩堝などもあって、西方の飛鳥池工房との関係を伺わせる。

ここでは、その存続期間と性格、周辺の遺跡との関係を考える上でも重要なSD010出土土器の概要を記す。

図64にはIトレンチの資料を示し、一連の遺構であることから、Gトレンチ(10～12)、第86次調査8トレンチの土器(1～8)を補足した。流路堆積は4段階に大別され、初期流路(47～51)、前期流路(22～46)、後期流路(16～21)、末期流路(13～15)に配列したが、それの大勢が存続と埋没の時期を示すわけではない。

1～8は第86次調査8トレンチの須恵器で、7世紀中頃～奈良時代初めのものがある。流路の存続期間の大略の幅を示すために抽出した。8は口径7.4cm。杯Gのなかで最も小さく、口径8.4cmの杯H(9)とともに水落遺跡出土例に類似する。10～12はGトレンチの須恵器で飛鳥IIに属すであろう。12は底部をロクロケズリした赤焼きの

須恵器であるが、内面の直放射・螺旋暗文と形態が土師器杯Cの模倣であることを示す珍しい資料。

13は平安時代初めの土師器杯A。流路の最終段階の年代の一端を示す。15は飛鳥IV～Vの須恵器椀A。16は平城宮土器編年のⅢ段階に属す土師器杯A。後期流路の存続年代の一端が奈良時代前半～中頃にあることを示す。17～19は小型で浅い須恵器杯H。20・21は口径12.5cmで深く、天井部底部外面はヘラ切りのまま。飛鳥Iに属す。

前期流路の土師器は杯C(23～26)、杯G(28～33)など7世紀初め～中頃の飛鳥I～IIに属するものが多く、甕A(34～36)、甕B、甕C、竈、甕、鍋(37)など多様な煮沸具がある。22はより新しい可能性がある土師器蓋。須恵器も飛鳥I～IIのものが多く、杯Hには最大径14cmの51のほか、45～47など小型で立ち上がりの小さいものが含まれる。38は須恵器台付椀の蓋。口径18.2cm。

初期流路の須恵器杯H(52)は飛鳥Iでも古い段階に属し、底部外周をヘラケズリする。土師器杯C(54・55)は径高指数35～32で飛鳥I～II。土師器杯B蓋(53)は大官大寺下層資料に類例があり、飛鳥IIIに属する可能性がある。 (西口壽生)

瓦 丸瓦、平瓦、軒丸瓦、鶴尾、土管などが出土した。全体に量は少なく、丸瓦は576点・64.9kg、平瓦は1828点・177.3kgが出土した。軒瓦は、飛鳥寺創建期の軒丸瓦が8点出土した。その内訳は、I型式3点(a:2点)、III型式2点、V型式2点、新型式1点。新型式(図65-2)は、斑鳩寺(法隆寺4型式A種、図65-1)や四天王寺(図65-3)と同范で、飛鳥寺では初出の素弁八弁蓮華紋軒丸瓦。斑鳩寺では若草伽藍金堂の創建軒丸瓦の一つとして、伽藍西方の北垣内瓦窯で生産されたと推定される。そののち、瓦範が楠葉平野山窯(大阪府枚方市・京都府八幡市)に移り、四天王寺用に生産された。今回出土したものは、瓦範の傷みや胎土、焼成からみて楠葉平野山窯の产品に間違いない。同窯では、奥山廃寺の角端点珠素弁八弁蓮華紋軒丸瓦の一つが生産されたと目されていたが、飛鳥寺に瓦を供給した時期とその背景に興味がもたれる。 (花谷 浩)

3 第91-6次調査

第92次調査のB～Eトレンチを設定した水田で、水路付替工事に伴うバイパス水路の施工に際して、工事立会調査を行った。バイパス水路はボックス・カルパートの埋設による。南区は第92次調査Bトレンチの西約6mで、幅3m、延長20m、南半は1段上の水田(H=112.9m)に及ぶ。北区は第92次調査Eトレンチの北東隅にかかる幅3m、延長15mである。

なおBトレンチの南北2箇所でも、工事試掘により、断面観察を行ったが、掘削深度が浅く、Bトレンチの知見を追認するにとどまった。

Bトレンチ西側の状況 南区では、トレンチ北端でH=111.0m、南端で111.8mまで掘削した。北端での層序は、耕土、暗青褐色粘土(床土)で、H=111.5m以下が流路堆積となり、暗灰色粘質土、灰色粗砂、灰色粘土、灰色砂、灰色粘質土の北東下がりの堆積が観察された。遺物の出土は少なく、流路としては、最終段階の堆積と考えられる。流路底には達していないが、トレンチ西寄りで検出した青灰色粘土(H=111.0～111.2m)は、流路以前の自然堆積の可能性がある。灰色砂から7世紀代の平瓦が出土した。

Eトレンチ北側の状況 北区は東寄りの大半が既存用水路工事時に搅乱されている。トレンチ西辺北端で、西側丘陵の斜面地山を確認した。丘陵に沿って2条の素掘溝を検出している。

北=上手の溝は、深さ70cmで、丘陵の岩盤をほぼ垂直に掘削している。トレンチ壁面に対して鋭角に交わっており、幅は確定しない。南=下手の溝はやや浅く、深さ25cmで、断面はU字形で、幅はやはり確定できない。いずれも水田の開墾に伴う溝である可能性が高い。

Eトレンチ下層の状況 Eトレンチでは、緩斜面の遺構面上に数条の溝を検出しているが、この遺構面は、淡黄褐色砂質土、茶褐色粘質土などからなる厚さ70cmほどの整地土上面であることが確認された。これはCトレンチの遺構面から連続するものと推定される。

整地土下のH=110.5m以下は青灰色粘質土の流路堆積となる。110.2mまで掘削したが、流路底の地山岩盤には達しなかった。岩盤は谷底に向かって急激に落ち込んでいるようである。

4 まとめ

万葉ミュージアムの建設を契機として着手した、この地域の調査は、今年度をもって一旦終結する。調査対象地に対して、発掘面積は些少であるが、2箇年の調査の成果と課題を概括しておく。

遺構面の形成 調査地は谷筋で、その両側の丘陵は風化の進んだ花崗岩である。谷内の遺構面は、谷川による堆積の上に、一部、丘陵を削平・整地して形成されている。谷は東丘陵裾から緩傾斜の平地となり、飛鳥池寄りの西側丘陵は、谷川の浸食により、急な傾斜である。

谷の利用状況 流路SD010の堆積中には、縄文時代の遺物もあり、この谷筋が古くから利用されたことを示す。整地を伴う積極的な利用は、7世紀中頃には始まっていたようだ。傾斜の緩い東側を主に利用し、谷川はSD010として、西寄りに管理した。流路に沿った5時期の堀は、流路と活動空間を明確に区画する意図が伺われる。

谷内の活動空間の性格は未だ不明である。建物SB004は西庇付の比較的大きい建物であった。SA046はその北の区画施設となる可能性がある。また、流路に平行するSA012から、東へ折れるSA016は、東側丘陵裾まで延びるようである。SA046とSA016の存在は谷の上流から下流に、複数の区画が設定されたことを示している。

また調査地南寄りのCトレンチで建物遺構が検出され、上流では谷の西側にも、施設を伴う活動空間が存在したことがわかった。

出土遺物では、少量ながら溶銅、鉱滓、坩堝などの工房関連遺物があり、丘陵を挟んで西側に隣接する、飛鳥池工房との関連が注目される。一方、やはり出土量は多くないが、飛鳥寺創建期の瓦が出土し、飛鳥寺との関連にも注意を要する。この地域での活動が、飛鳥池工房に関わるのか、飛鳥寺に関わるのかは、遺構・遺物からは判断しきれない状況である。質的な差はあるが、飛鳥池遺跡北地区の帰属関係と同様の問題を持つ地域といえる。

流路SD010の様相 調査地上流部のBトレンチと第91-6次南区は全体が流路堆積、D・Eトレンチに遺構面があり、流路SD010はD・Eトレンチ間に流れていたと想定される。Dトレンチの掘立柱塀SA042・043が、当時のSD010の方向を示しているようである。中流のGトレンチでは、SD010の東岸から最深部までを確認した。

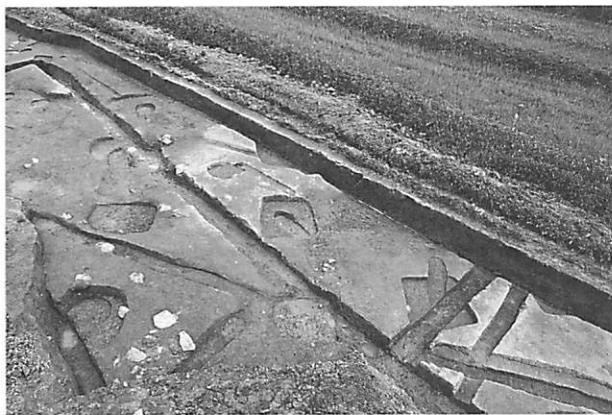


図66 掘立柱建物SB004 南東から

最深部は幅1.5mで、東で1段高いテラス状の流路底を含めて3m程である。西岸は未確認だが、現地形から見て流路幅は最大6~7mであろう。満水時の水深は0.8m程になるが、通常の水量では、浅い流れであろう。下流部のIトレンチでは東岸から最深部までを確認した。流路は徐々に西へ移り、現状用水路まで25m程の範囲で推移した。谷から出た流路は、飛鳥寺寺域東辺に沿って北流するのは間違いない。

流路SD010の性格 流路SD010は、谷筋の積極的な利用にあたり、既存の谷川を整理・改修したものと位置づけられる。SD010の成立は7世紀中頃と推定するが、西岸を強く浸食し、平安時代後期には、現在の用水路の位置まで西遷し、当初の流路部分は水田化していた。

さて、前年度の報告では、SD010と書紀にいう「狂心渠」(たぶれごころのみぞ)との関連について言及した。SD010がBトレンチをさらに遡ることは明らかであるが、



図67 流路SD010 Iトレンチ南西から

上流部では人為的な開削の痕跡を確認するにはいたらなかった。また「石上山の石」に相当する天理産砂岩は、今回の調査でも出土していない。「狂心渠」か否かは、SD010がこの谷から出た、さらに下流部の様相が明かになるまで、判断を差し控えておきたい。

(長尾 充・土器：西口・瓦：花谷)

コラム：あ す か ふ じ わ ら ④

表5 1998年度の記者発表

日付	発表内容	関連調査
1998.4.15.	飛鳥池遺跡検出の梵鐘鋳造遺構について	第87次
4.23.	飛鳥池遺跡 飛鳥藤原第87次調査 現地説明会4.26. 見学者890名	第87次
9.4.	飛鳥藤原第84次調査出土木簡について(その3)	第84次
9.29.	飛鳥池遺跡出土の金・銀 特別公開10.7.~10.30. 於・調査部	第87次
10.15.	飛鳥池遺跡 飛鳥藤原第93次調査 現地説明会10.18. 見学者600名	第93次
12.22.	飛鳥池瓦窯の発見とその意義	第93次
1999.1.19.	飛鳥池遺跡出土の富本銭 特別公開1.25.~2.10. 於・調査部 見学者9300名	第93次
3.11.	吉備池廃寺の発掘調査 南面・西面廻廊および中門推定地 現地説明会3.13. 見学者400名	第95次

◆記者発表の記録

本年度は、当調査部主催の報道記者発表が、計8回行われた。うち7回が飛鳥池遺跡の関連である。これで同遺跡の記者発表は、1997年の調査開始以来、通算13回となった。

現地説明会は、3回を開催して、見学者総数約1900名の盛況であった。

調査部の展示室では、飛鳥池遺跡出土の「金・銀」と「富本銭」の特別公開を行った。とりわけ、富本銭の展示期間の見学者は、一日平均700名を超え、13日間で通常入館者の5年分?を記録した。狭い基準資料展示室は大混雑。庶務室は問合せの電話への対応でおおわらわであった。

(N)